

# 西洋中世学会 第14回大会シンポジウム

## 危機を前にした人間

### 西洋中世における環境・災害・心性

2022年6月19日(日)

立教大学池袋キャンパス9号館大教室

趣旨説明

コーディネータ：小澤実 Minoru OZAWA (立教大学)

新型コロナウイルスの蔓延とロシア・ウクライナ戦争を目の当たりにしたこの2年間で、私たちの世界に対する見方は大きく変わった。それらに加えてインターネット情報の氾濫、グローバル経済の展開、気候変動の進展、政治体制の先鋭化や人権意識の変容などにより、2022年は新しい時代を迎えた感がある。そのような時代を生きる私たちは、自然災害や人為災害を前にした時、どのように考え、振る舞い、対応しているのだろうか。そして、そのような私たちは、100年後の歴史家から、どのように歴史の中に位置づけられることになるだろうか。

おりしも、自然環境と人間との関係を問う歴史研究もまた活況を呈している。そのような研究であれば、長期間での地理条件の変化と歴史動体の関係を論じるブローデル、気候変動それ自体を歴史化するラデュリ、人間と動物との関係を語るドロールらの研究がすでにあるのではないかと、言うかもしれない。しかしながら、近年における環境史研究は、以下のように新しい局面を迎えつつある。

- ①文字史料に残るデータの悉皆調査による総覧化
- ②堆積物分析、花粉分析、DNA分析、天文観測などを通じての自然科学データの精緻化
- ③SDGsや新人世(Anthropocene)が要請する間・社会・自然環境との関係に対する視点の移動
- ④認知科学や感情史研究を通じた、認識主体である人間の認知能力に対する理解の深化
- ⑤環境決定論に抗するような国家や共同体といった人間側の対応の強調

次々に刊行される Bruce Campbell、Kyle Harper、Michael McCormick、Johannes Preiser-Kapeller らの研究やプロジェクトは、従来にも増して複層的かつ動体的なヨーロッパ中世像を私たちに提供しつつある。国境や民族といった近代に起源を持つ枠組みの相対化として試みられてきた「接続と比較」に加えて、自然科学の知見によって急速に明らかになりつつある気候変動や疫病転移という地球全体を覆う動きもまた、グローバルヒストリーにおいて不可欠の要件となりつつある。より具体的に言えば、初期中世から中世後期に至るまで幾度となくもたらされるユーラシア中央部からの疫病要因の伝達、1257年のインドネシアにおける大噴火の影響、中世温暖期の終焉に伴うグリーンランドから黒海沿岸にまで至る食糧危機や廃村化、そうした自然環境や社会構造の変化と関連するであろう人間集団の移動、政治的枠組みや経済構造の変化、心性の動揺といった諸現象は、従来の環境史をこえた、中世グローバルヒストリーが対象とすべき新局面といっても良い。このような論点を組み込んでゆ

くならば、大きな海域を挟んで新大陸、アフリカ、アジアと交渉する中で形作られたであろうヨーロッパ半島の歴史の中で、我々がこれまで「西洋中世」として観念化かつ特権視していた時空間で生じた諸現象を、新しい角度から見直す契機となるかもしれない。

以上のような研究動向を念頭に置いたうえで中世社会へと目を向け直してみた場合、行政文書、年代記、碑文、宗教テキスト、文学作品、絵画や彫刻、建造物、音楽、日用品などあらゆる史資料の中に、人為的なものであれ自然に基づくものであれ、災害と向き合う人間の姿を見出すことができる。「暗黒の中世」から「明るい中世」へと評価軸がうつる一方で、中世は如何ともし難い災害にも満ちていたことも忘れてはならない。本シンポジウムでは、5つの報告とそれを踏まえたユーラシア視点のコメントを通じて、近年のグローバルヒストリー研究により明らかになりつつある「中世」という舞台設定に関心を向けながら、旧約聖書における「大洪水」の記憶を共有しながらその時代特有のエコシステムと認識枠組みの中で生きる人々が何を災害と捉え、それらをどのように感じ、そしてどのように対処したのかを、アフロユーラシア世界や日本との比較並びに21世紀の災害と対峙する私たちにとってのアクチュアリティをも踏まえて、考えてみたい。

#### 1. ヨハネス・プライザー＝カペラー Johannes PREISER-KAPPELLER (オーストリア学士院)

### 紀元千年のグローバルな危機？ —比較観点による10-11世紀のアフロ・ユーラシアにおける 気候変動、天体现象、社会的・政治的動乱—

紀元千年紀の転換期において、キリスト教共同体のそこかしこでは終末論的な期待が高まっていた。このような不安と希望は、紀元千年前後の数十年間だけでなく、その後の11世紀を通じても——例えば1030年頃(イエス・キリストの磔刑と復活から1000年後)や1064/1065年頃(主の復活年と同じ復活祭の日が再び訪れる年という計算に基づく)——至るところで確認できる。このような推測こそが、西欧、ビザンツ帝国(レオン・ディアコノスなど)、アルメニア(エデッサのマテウスなど)の著述家は著述へと駆り立てた。さらに同時代には、イスラムの一部(イスマーイール派)や仏教の一部(「法の墮落した時代」、つまり日本でいう「末法」の思想と結びついている)でも、時代の転換を予想する動きがあった。彼らは、このような歴史と現状に対する見方を説明し裏付けるために、天体现象(1066年のハレー彗星の出現など)、異常気象(干ばつや洪水)、その他の災害(地震や疫病)を終末の前兆として解釈したのである。実際、近年の歴史気候学によれば、西欧から東地中海(ビザンツ帝国やファーティマ朝)、中東、中央アジアを経て中国や日本に至るアフロ・ユーラシア全体で異常現象の頻度が増加していることが確認されている。これは1010年から1080年の太陽活動の「オールト極小期」と一部関係があるようである。他方でそれ以前の災害は、939年(アイスランドのエルトギャウ山)や946年(朝鮮半島の白頭山)のような大規模な火山噴火の余波による気候異常と関連していると考えられる。

しかしこれらの自然現象は終末論の原因ではない。その記述は当時の著述家を選択してテキストに組み込んだものである。彼らは個々のナラティブ戦略に基づき、特定の時代や支配者に応じて災厄を詳細に報告することもあれば、ささやかにしか報告しないこともあった。本報告が示すように、「社会のアーカイブ」と「自然のアーカイブ」との比較だけでなく、複数のテキストや歴史叙述を比較することで、これらの異常な出来事の程度と影

響を「三角測量」することが可能となる。加えて、歴史資料は、その構成意図を考慮することなく、単なる環境データの一つとして用いることはできないことが明らかになりつつある。さらに言えば、従来、学者たちは、終末論的な雰囲気テキストばかりを特に選んで読むことで、この時期にいくつかの社会が「崩壊」というシナリオを確立しようとしてきたが、よりバランスのとれた比較分析を試みるならば、大西洋と太平洋で生成した一連の政治体の社会・政治的枠組みの中核的要素がいかに驚くべき回復力を備えていたのかが浮き彫りにされるだろう。(翻訳 小澤実)

## 2. 唐澤一友 Kazutomo KARASAWA (立教大学)

### アングロ・サクソン時代の危機管理 —古英語の wisdom poetry を手掛かりに—

本発表では、アングロ・サクソン時代(450~1066年)のイングランドにおける危機管理について、当時書かれた文学作品(文献)を手掛かりにしながら考えてみることにする。例えば、アングロ・サクソン時代には法律が整備されており、その中には犯罪行為等により社会秩序が乱された際の法的対処法がまとめられている。あるいは、当時の文献の中には、様々な疾病に対処する方法がまとめられた医学書の類もあり、これもある種の危機に対処することが目的とされたものである。法律や医学書の類は、起きた事柄に対してどう対処するかということに主眼が置かれており、その意味において、危機を未然に防いだり、あるいは、未然に防げなくともその被害を最小限に留めようと備える危機管理とは少し異なる性質のものだといえるが、そういった意味での危機管理を本格的に扱った当時の文献は知られておらず、したがってその実態も詳しくは知られていない。その一方で、当時の文学作品の中には、ある種の危機管理と関連し、しばしば言及される文学的モチーフがいくつかある。本発表では、そのような文学的モチーフに着目しながら、当時の人々の間における危機管理についての考え方の一端を垣間見てみることにする。ここでは特に、アングロ・サクソン時代の世界観がよく反映されていると考えられる一連の wisdom literature に分類される作品、その中でも特に当時の格言を集めた詩 Maxims I を手掛かりにしつつ、随時これら以外の様々な作品に見られる例にも言及しながら話を進める。自然災害や疫病の流行などに対する危機管理については、これが扱われた作品が見当たらないため、本発表では、社会秩序の維持や外敵による侵略、および誰もが避けて通れない死と関連した危機管理を中心的に扱う。上記の作品を含む古英語による wisdom literature の他、英雄詩 Beowulf, Anglo-Saxon Chronicle, 10世紀末から11世紀初頭頃の Ælfric や Wulfstan による説教などの文献も参照しながら話を進める予定である。

### 3. 後藤里菜 Rina GOTO (川村学園女子大学)

#### 女性と〈身体〉という危機

#### 12世紀の敬虔な女性マークヤータのクリスティーナ（1096頃-1155頃）を題材に

中世キリスト教世界において女性を語る基本的なカテゴリーは処女・寡婦・妻であった。処女を守ることが何よりも救いに繋がる道であり、女性は男性を色欲の罪に陥れる存在として語られた。女性の〈身体〉そのものが、とくに神に熱心に仕えようとした修道士や聖職者らにとってはその道を邪魔する、危機をもたらすものであった。そこで、その危機の回避が重要であり、たとえば悪霊が女性の〈身体〉をまもって目の前に現れた時にそそのかされず祈りで追い払うことが、聖人伝で聖人のたどる初期段階で語られている。

女性たち自身にとっても〈身体〉を通じた同様の危機はありえたはずだが、12世紀以前の聖女伝では、女性は男性の肉欲を煽る存在としてのみ語られ、女性たちの肉欲についてはほとんど言及がない。だが、マークヤータのクリスティーナ（1096頃-1155頃）の伝記では例外的に早く、肉欲との葛藤が述べられている。著者は聖アルバン修道院の修道士で、修道院長ジェフリーとクリスティーナが霊的な愛で結ばれ、彼女の祈りや幻視が幾度も彼を助ける場面が熱心に描かれている。二人の関係を肉的な愛と揶揄する者もいたため、肉欲との戦いの段階を脱していることを主張すべく、その戦いが記述されたと考えられている。

だが、クリスティーナにとって肉欲との戦いと打破は、たんにジェフリーとの霊的な愛を実現させる前提だっただけなのだろうか。クリスティーナの伝記は、たしかにジェフリーが修道院長であった時の聖アルバン修道院にとっての理想的なクリスティーナ像を描いたものだが、聖性のプロトタイプを並べたものではなく、ある程度彼女の体験が語られている。ジェフリーの登場以前に、霊的助言者などの形で幾人もの男性が登場する。そこで本報告では、肉欲との葛藤の箇所はもちろん、男性と関わる幾つもの過程を〈身体〉に注目して読み解きながら、彼女の霊性と〈身体〉という危機について考えてみたい。

### 4. アダム・タカハシ Adam TAKAHASHI (東洋大学)

#### 政治的危機と神的秩序：

#### アウグスティヌス、アキナス、ウィクリフ

西欧の伝統において、世界は二重化された側面をもって人々の前に現れていた。一つは感覚的に把握ができる自然的あるいは社会的現実であり、もう一つは直接的には知覚されえない神的な秩序である。この二重性の近世期における発露として、エルンスト・カントロヴィチが論じたような、王の二つの身体とその乖離とをあげることもできる。だが、可視的な現実と神的な秩序との関係は、歴史的に常に同一の形で了解されていたわけではなかった。特に政治的な危機が生じた際には、その二重性があらためて議論的となり、結果的にそれらの関係の理解も大きく変容することになったのである。

本報告の目的は、危機的な社会状況のなかで、キリスト教神学者たちが、目の前の現実と神的秩序との関係とをどのように折り合わせようとしたのかを、複数の事例をもとに検討することにある。具体的には、古代末期の

アウグスティヌス、十三世紀のトマス・アクィナス、十四世紀のジョン・ウィクリフの三者を取り上げる。アウグスティヌスは、ローマ略奪の原因をキリスト教信仰に帰する者たちを論駁するなかで、神（神々）と国家との関係を問い直し、その後の思想の雛形を作った。アクィナスは、アウグスティヌスの議論を前提としつつも、哲学者アリストテレスの教説を踏まえることで、この世界の秩序が単に神の意志に由来するものなのではなく、それ自体として自然的実在性を有している点を強調した。ウィクリフは、いわゆる「教会大分裂」の状況のなかで、教皇と世俗君主のそれぞれの支配権の関係を再定義しようとした。

これらの事例の検討によって、神学者たちが社会的な現実と神の定める秩序との関係をどのように理解し、また政治的危機のなかでその理解がいかに変容したのかが明らかにされるだろう。

## 5. 今井澄子 Sumiko IMAI (大阪大谷大学)

### 疫病と美術

#### —14・15世紀フランスとネーデルラントの物語表現を中心に—

戦争がもたらす人為的災害や気候変動が引き起こす自然災害とならんで、中世後期にヨーロッパを幾度も襲った疫病は、人々の心性、ひいては美術と表象の領域にも並々ならぬ影響を与えた。疫病を扱った美術史研究としては、Meissの『ペスト後のイタリア絵画』(1951年)が古典的著作として知られる。14世紀中頃に猛威をふるった所謂「黒死病」が美術作品にもたらした影響をめぐっては、ミース以後も研究が進められており、近年ではCohn Jr.などが、イタリア各都市における事例研究を通して、人々が新しい自意識を持つようになったことを示している。また、Boecklは、黒死病を起点としつつ、中世から現代にかけて、伝染病のイメージが徐々に開拓されていくさまをだどった。同論考では、中世において、聖セバスティアヌスなどの特定の聖人を主題とする宗教画が増加する様子も示された。

本報告では、上記の研究動向を踏まえつつ、14～15世紀のフランスとネーデルラントの美術作品の「物語表現(ナラティブ)」のあり方に焦点を当て、疫病に対峙した人々の思考の痕跡と価値観を読み取っていききたい。まず、ランプール兄弟による時禱書群やリーフランクスの描いた祭壇画の検討から、当時の人々がいかに聖人にすがり、危機からの救いを求めたかという点を確認する。つぎに、都市トゥルナーで制作された『年代記』挿絵、および、同市のノートルダム大聖堂に寄進された《聖ピアトゥスと聖エレウテリウスのタペストリー》に注目する。トゥルナーは疫病の被害を幾度となく受けてきた都市の一つであったが、1092年の危機を経て、今日まで続く大規模なプロセションが行われるようになった。そのような歴史を背景に制作された作品群には、美術作品が聖人崇敬の促進ばかりでなく司牧教化のためにも利用された可能性がうかがえる。すなわち、疫病のモチーフは、注文主の政治的な意図とも不可分なものであったと位置づけることができるであろう。